

【解説】「マアム選手！ 今回も華麗な勝利となりました！」

【観客】「おおおおー！ マアムー！ マアムー！」

闘技場では美少女格闘家・マアムの健闘を称えて、マアムコールが起きていた。そんな熱気あふれる会場の片隅で、僕は黒ずくめのフードに身を包み、じつくりとマアムさんの戦う姿を観察をしていた。

【僕】「…これだけしっかりと観察できれば、多分大丈夫だろう…！」

僕は新米の魔法使い。

僕は念願のとある魔法を使うため、マアムさんを毎日ストーキングして、

その肉体の隅々まで観察し、そして今日は闘技場で戦闘力も観察した。

僕は興奮する気持ちを抑えながら、闘技場を後にした。



【僕】「よー、ここなら大丈夫だろう。」

僕は、街の外にある廃屋の中へと移動し、そこで精神を集中させていく。

魔法力がどんどん高まっていき、全身を包み込んだ瞬間、僕は呪文を口にした。

【僕】「モシャス！」

《ワロハハハ》

僕が呪文を唱えると、僕の矮小な体が一瞬で変化した。

短かった手足はすらりと延び、醜く太った体は引き締まり、

コレコレだった薄汚いローブは、ピンク色の綺麗な武道着になった。

僕はついに、モシャスの魔法でマアムさんの肉体に変化する事に成功したのだ。



【僕】「や、やっと成功した！」

僕は廃屋内に立てかけて置いた大きな鏡を、恐る恐るのぞき込んだ。そこには、先ほどまで闘技場で雄姿を見せていたマアムさんが映し出されていた。僕が試しに体を動かしポーズを取れば、鏡に映し出されているマアムさんも同じように動き、華憐にポーズを決めてくれる。

【僕】「あう……♡ つ……ついで……僕がマアムさん……♡」

体を動かせば、武道着に包み込まれた胸がゆれ、布にこすれる感覚、

武道着のスカートが揺れ、パンストに包まれた足にこすれる感覚、

そしてハイレグの下着が、尻と割れ目に食い込んでくる感覚が伝わってくる。

こんなエッチな感覚に包まれていたなんて。僕は興奮でいてもたっても居られなくなった。



【僕】「お、オマングを見てみないと……♡」

僕はマアムさんの裸もこっそりのぞき見した事はあるが、オマングを見た事は数えるほどしかないし、はつきり見た事もない。そんな状態でモシヤスを使ったから、感覚的にチンゴは消えているけど、実際にどのような見た目になっているのか、少し心配だった。そして僕は、ドキドキしながらパンストを下着を脱ぐと、そこには毛の生えていないツルツルの割れ目があった。

【僕】「あ……♡ マアムさんパイパンなんだっ……♡」

スタイルの良い肉体と、豊かなおっぱいに似合わない、未成熟な割れ目。もっともっとマアムさんの体を見たい。僕は武道着を脱ぎ、鏡の前で股を開いた。



【僕】「うわ…おっぱい凄っ…♡」

僕が服を脱ぐと、マアムさんの引き締まった体が露になり、大きな乳房がプルンと揺れる。大きく足を開いて股間を見ると、ほんの少しピンクの肉がはみ出したマアムさんの綺麗なオマンコが見える。

【僕】「や、やばっ…♡ 早くこの体でエロい事がしたいっ…♡」

このオマンコの奥をかき回したら、どんな快楽を味わう事が出来るんだらうか。僕は魔界の触手を召喚し、そのオマンコを左右へと開かせていく。



《にちやっ…くぱあっ…》

【僕】 「あっ♡ 開いたっ♡」

触手がオマンコを開けると、  
愛液が糸を引いて垂れ落ち、  
クリトリスと尿道、膣口が露になる。  
そして膣口には、処女膜も確認できた。

【僕】 「マアムさんは処女なのか♡  
コレを破れば、僕がマアムさんの  
初めてを奪う事になるな…♡」

そして俺は、以前から考えていたプレイで、  
マアムさんの処女を奪うために、  
再び武道着に身を包んだ。



「僕」 「さて…まずはストレッチだ♡

実戦の前に、体をほぐしておかないとな♡」

武道着に身を包んだ僕は、  
ノーパン＋ノーストッキングのまま  
床に手と頭を付き、両足を大きく  
開いてストレッチをした。  
これだけ体がしなやかに  
動くのは、流石武道家だ。

「僕」 「ふふっ♡

あのマアムさんが、オマン「丸出しで  
こんなに足を開くなんて…♡」

マアムさんは闘技場で戦う前に、  
ストレッチや準備運動は欠かさない。  
しかし、当然だがこんな卑猥なポーズを、  
しかもノーパンでやるなんて事は絶対にない。

「僕」 「あっ…♡ オマン」に風が当たってる♡」

大きく開いた両足に引っ張られ、オマン」も軽く口を開ける。  
愛液が糸を引く感触に、僕はビクンと体を震わせる。

「はあっ……♡ はあっ……♡」

「そ、そろそろ準備が出来たかな……？」

両足を大きく開く、卑猥なストレッチで、充分に股関節がほぐれた所で、僕は先ほど触手を召喚した、特殊な魔方阵に視線を移した。

「僕」 「フフツ……♡」

「これなら問題」

「なさそうだなっ♡」

先ほどは軽い魔法カシが使っていないなかつたので、オマンコを軽く開く程度、数本程度の触手しか召喚出来なかつたが、僕がストレッチしている間、魔法力を注ぎ込み続けた事で、魔方阵は禍々しい黒い光を放ち始めている。

「僕」 「……マムさんの……この体の初体験、

間違いなく触手しか無いだろうな♡」

そして僕は立ち上がり、召喚のための呪文を唱えた。



「僕」 「いでよ魔界の触手！ デルパツ！」

僕の呪文と同時に、魔方陣から赤黒い肉の塊が飛び出し、あつと言う間に廃墟の壁面を埋め尽くしていった。その壁面からは、先ほどこの体のオマンコを広げた触手より、さらに太く、強力な力を持ったものが、無数に生えている。触手は獲物を見定めるように、召喚主である僕の命令を待つように、僕の周囲へと集まり、体に絡みついてくる。

今からマアムさんが…美少女であるこの肉体が、こんな触手に襲われ、処女を失うのか…。

僕はドキドキしながら口を開いた。

「僕」 「…召喚者として命ずる。この僕の体を犯しつゝせう！」

《ずじゆっ…… プチプチプチツツツッ！》

【僕】「ひぎっ！ ああああっつっつっ！」

僕の命令と同時に、触手は僕のオマンコに入り込み、  
処女膜を引き裂き、異物がねじ込まれる痛みを僕へと与えた。  
同時に僕の口の中にも入り込み、生臭い粘液を胃袋へと流し込む。  
粘液は膣と胃から同時にしみ込んできて、僕の体を火照らせる。



【僕】「……ん？ っ、んっ……ああっつっっっっ♡♡♡♡」

触手から分泌される粘液は、痛みを打ち消し快楽を増幅させる効果がある。  
処女喪失の痛みはすぐに失われ、僕は女体の快楽に頭が真っ白になっていく。